

11月30日（月）ルカ4：18

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油をそそがれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。……」

「悲惨、心痛、窮乏、孤独、無力および自責の思いは、神のまなざしのまえでは人間の判断とはまったく別物です。人々が背を向けるのを常とする場所にこそ、まさに神はご自身を向けられるのです。キリストが家畜小屋で誕生されたことは、拘留者には他の人たちよりもよく分かります。それは、彼にとって本当に喜ばしい知らせであり、しかもそれを信じることによって、彼はあらゆる時空的制約をうち砕く、全キリスト教徒の交わりの中に身を置いていることを自覚し、監獄の壁も彼にとってはその意味を喪失してしまうのです。」



12月1日（火）イザヤ9：6

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。

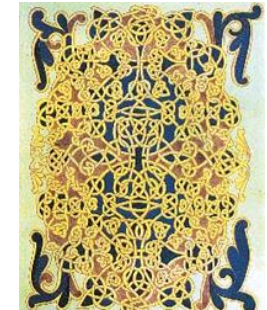
「民の最も深刻な罪責と危急のただ中で、静かな、秘義に満ちた、しかしこの上なく幸いな確信に溢れた一つの声が、ひとりの神、神のみどりごの誕生による救いについて語るのです。しかし成就の時が満ちるまでには、まだ七百年あります。私たちは、来年何が起こるのかも知らないのに、何世紀も先のことが人に見えるということを、どのように理解すべきでしょう。」



世界の初めと終わりを握っている神の霊だけが、選ばれた人間に、将来の秘密を啓示することができます。それは、何世紀をも貫いて静かに響き、それに個々の預言者たちの声がそこかしこで加わり、最後に羊飼いたちの夜の礼拝の一つとなり、キリストを信じる教会の溢れる歓喜の一つとなるのです。『ひとりのみどりごがわれわれのために生まれる。ひとりの男の子がわれわれのために与えられる』と。」

2日（水）イザヤ9：6

主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。



「永遠の父」—このような子どもの名前があるでしょうか？

「このみどりごは、人間的な神童ではなく、天の父の従順な子どもであることを願っています。みどりごは、時間の中でこそ生まれましたが、自らの出生とともにこの世に永遠をもちこまれたのです。神の子として、天にある父の愛を私たちすべての者にもたらすのです。」

行って、飼葉桶の傍らに永遠なる父をさがし、見いだしなさい。そこでは永遠なる父が私たちの慈悲深い父ともなってくださったのですから。」

3日（木）イザヤ9：7

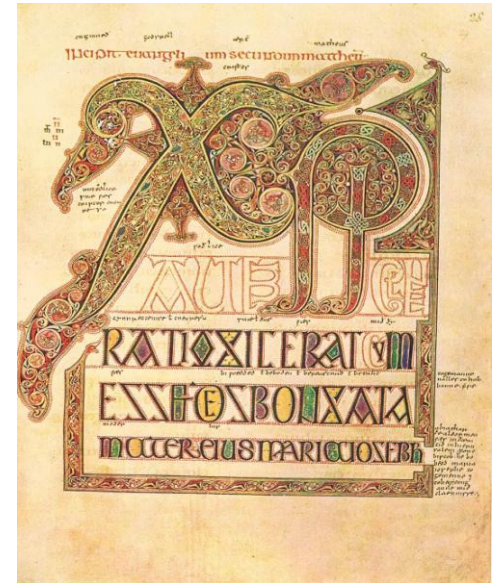
その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

5日(土) マタイ2:11

その家にはいって、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。



みことばと共に行くアドベント 2015 第1週



「人類の未だ満たされない切なる願い、すなわち平和と正義の国は、神の御子の誕生とともに始まりました。私たちはこの御国へと招かれています。私たちが教会で、信仰者の交わりの中で主イエス・キリストの御言葉と聖礼典にあずかり、主に信頼し、そしてまた、飼い葉桶のみどりごのうちに、私たちの救い主と助け主を認め、その愛のうちに新たな人生を贈ってもらうならば、私たちは、その御国を見いだすことができるのです。今より一つまり主イエスの誕生から、とこしえまで—この御国はつづくのです。

なぜならそれは、万軍の主の熱心が—一人間のあらゆる罪過、あらゆる反抗にもかかわらず、この御国が永遠に存続し、その究極の完成に到達することを保証するからです。」

4日(金) ルカ2:10

御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。

「天使のことを歌った懐かしい童謡に、『ふたりの天使がわたしを護り、ふたりの天使がわたしを目覚めさせる』とあります。そのように、見えない優しい力のようなものによって、夕べにあしたに護られているということは、子どもたちにとってと同様、私たちおとなにとっても、今日、やはり必要不可欠なことなのです。」

およそアドベントの華やかさのない廃屋の瓦礫のなかでの礼拝、この古い絵は今現在の地球のどこか、でもあるでしょう。

「『すべての時代の主である神』の憐れみのうちに『あたかも未来がすでに実現したかのように、神によって生き』、『今まさに来ようとする神が、もうすでに到着したことを承知している者』として、『永遠の相の下に』生きるべきことを、ボンヘッファーは、クリスマスの奇蹟を通して私たちに語りかけます。それは、今も私たちの心を捉え、励まし、クリスマスの真の歓びにあずかせてくれます。」—高橋裕次郎